

『資本論を読む会』次回 (6月例会)への案内です！

DAS CAPITAL



【6月の「読む会」は】
2019年6月18日(火) 午後6時から
会場:支局・社青同事務所

◎次回は「第3章 貨幣または商品流通」の「第2節 流通手段」

5月の例会は、様々な事情が重なって、参加者は4人になりましたが、Takさんからの「第3章・第1節 価値尺度」の丁寧なレポートを頂きました。Kaiさんからも経済学要綱からのまとめが配布されました。第一節を読み終え、次回は「第2節 流通手段 a商品の変態」からです。レポートはKaiさん。よろしく。

初めての方も歓迎。

『資本論第一分冊』(国民文庫)は、社青同にも何冊か在庫があります。また、これまでの資料は下記ホームページでご覧になれます。

◎ <http://socialistho.cafe.coocan.jp/> 「資本論を読む会」コーナーにあります。

レポーターから

第一巻 第一編 商品と貨幣 第三章 貨幣または商品流通 第一節 価値の尺度

○(貨幣の機能①価値尺度機能)貨幣・金の第一の機能は、質的に同一で量的比較のできる大いさとして商品価値を表示すること。価値の一般的尺度として機能し、金が貨幣となる。

○(価格)商品の金貨幣による価値表現は、その商品の貨幣形態であり、価格である。

○(観念性)見えない価値が商品の中に存在し、頭(観念)の中で金との関連で表示される。価値尺度機能は観念的なものだから、表現上、現実的な金を全く必要としない。

○(価格の尺度標準)価値が観念的金の量で表現されるようになると、技術的に、これらの価値を、「尺度単位」により固定量の金に関係させようとする必然性が働く。尺度単位は分割され、ポンド・オンス等の、「貨幣尺度標準」つまり「価格の尺度標準」の名称となる。

○(二つの尺度)貨幣は、①価値尺度、②価格尺度標準として、二つの全く違った機能を行う。価値尺度は、価値を測り価格に転化する機能。価格尺度標準は、価格の金量(1オンス重量の金等)を貨幣(3ポンド17シリング10.5ペンス等)として測る機能。

○(価格変動の要素)「商品価値」と「貨幣価値」の両者の変化の結果に価格変動は規定される。商品価値不変で貨幣価値が上下すると、商品価格は反比例する。貨幣価値不変で、商品価値が上下すると、商品価格は正比例する。

○(貨幣名の重量名からの分離)貨幣名はしだいに最初の重量名から分離する。

○(価値からの価格の偏倚)価格が「商品価値量・貨幣量を表す」としても、逆に、価格は必然的にその「商品価値量を表すもの」であるとは言えない。価格は、「ある事情」でその価値量より上下する。それでも、①商品の価値形態であり、②その価格は貨幣との交換比率の指数であるから、商品の価格であることには違いない。

○(偏倚は価格の問題)価値からの価格偏倚の可能性は、価格形態そのものの中にある。

○(無政府性)この価値との不一致・偏差は、欠陥ではなく、逆にこの生産様式に良くあてはまる形態にする。規律は「無規律性が盲目的に作用する平均法則」としてのみ、貫かれる。

○(無価値価格)一つの質的矛盾として、価格が価値表現をやめることにもなる。商品ではない良心・名誉等々も、価格によって商品となる。価格はここでは想像的なものとなる。他方、人間労働が対象化されていない未耕地価格のような想像的価格形態も、現実的価値関係やそこから派生した結びつき(地代との関係)を隠していることがある。

○(現実の貨幣との交換の困難性)価格表示は、等価形態の金(貨幣)が鉄(商品)と交換できることを示すが、鉄(商品)が金(貨幣)と交換できることを表現するものではない。価格形態は、貨幣に対する「売り渡し可能性」(商品→貨幣)と、貨幣に対する「売り渡しの必然性」(貨幣→商品)を内包している。

○(貨幣実在の優先性)金は、すでに交換過程に貨幣として機能しているから、観念的価値尺度として機能するのであり、観念的価値尺度の中に硬い金が待ち伏せている。

※「価値」は「貨幣」として現れ「価格」に転化。運動・発展し、「新たな機能」を得る。みごとな「弁証法」だと思いました。次回は、「第2節 流通手段」(185p～)です。

